

永禄九年越前一乗谷周辺にいる迄何処に

一五六六（永禄九）年九月八日、若狭にいた義昭^{よしあき}が、越前敦賀に移り、同年末にはさうに一乗谷の朝倉氏の許へ移つた、と見られてゐる。義昭側近の細川藤孝^{ふじたか}と明智光秀との出会いは、その時で、光秀は、藤孝に仕え、義昭の上洛を支援してほし、との要請に応えようとしたようである。義昭・藤孝は、朝倉の力を借りようとしたが、光秀から頼りにならないことを聞き、信長に頼ることにした。信長の正室帰蝶の母小見^{おみ}の方は、明智氏の出であり、光秀の縁戚関係にあつたからである。

一五五六年（弘治二）年、可児長山城を逐^おわれた光秀は、越前朝倉氏の庇護を受けようとしたので、当初は丸岡長崎（坂井市）の称念寺（時宗）門前にて潜居した、とうい説が出てきた。その説は、一乗谷の朝倉城館遺跡資料館学芸員の石川美咲氏が、発見した「遊行三十一年京畿御修行記」を基にして発表している。称念寺二代同念上人が遊行中の一五八〇（天正八）年、坂本城の光秀と会見した折の会話内容にある。この越前説では、さうに、光秀は、妻子を置いて、自らは京畿へ旅をし、京都で公卿たちと交流したり、堺で鉄砲術を学んだりした、と

もしている。やがて、帰ると、朝倉氏の鉄砲指南役として仕官し、一乗谷の西の東大味^{おおみ}に住んだ、といつ。

長山城落城の弘治二から四年後の一五六一（永禄四）年義龍は死去するが、美濃で潜居できなかつたのは、義龍の実父は土岐頼芸として味方する土岐氏もいたからであつ。越前への落ちのびるルートとしては、郡上谷筋を経て越前入りした説もあるが、ゆかりの地がある山県郡中洞・大桑付近から、大野郡桂（現揖斐）に寄留後、徳山氏を頼り、冠峰から越前に入つた説も考えられる。



明智神社(福井県福井市東大味)

信長に仕え 義昭上洛に従う

一五六八年（永禄一一）七月一五日、信長に迎えられた義昭は、細川藤孝・明智光秀に伴われ、岐阜西庄の立政寺に入つた。同年九月七日、信長は、義昭を供奉して上洛するため岐阜を出陣し、藤孝と光秀は従軍した。

天下統一を推進する 信長を支援

上洛以後、信長は木下藤吉郎・丹羽長秀とともに、光秀を軍政に参加させた。義昭を奉じて入洛して以後、信長は、朝廷への諸寄進をはじめ、公家たちとの交渉で、光秀が有職故実に明るく、義昭の将軍宣下などもそつなく進め、その能力を高く評価したようである。その上、禅宗に帰依し、和歌・連歌・茶道も良くする文化力も保持していた。そのため、京都の朝廷だけではなく、寺社や町民統制を担うこととなつた。

以後、各地での天下統一にかかる諸戦でも智将ぶりを發揮して、ついに、西近江から丹波方面の支配を任せられる近畿管領的立場に大出世した。



福知山城（京都府福知山市）

なぜ主君織田信長父子を討つたか

明智光秀は、信長の命を受け四国の雄長宗我部元親(土佐の大名)を攻略していった。元親は、一五七六(天正四)年阿波の三好康長・羽床等を下し、やがて四国全体に勢力を拡大していった。光秀は、重臣斎藤利三の娘を元親に嫁がせ、信長への臣従を約束させていた。ところが、元親に逐われた三好康長が秀吉に近づき、勢力復帰を図り、元親のことを種々讒言さんげんしたのか、秀吉は信長に元親を討つように進言した。それを受けた信長は、それまでの約束を反故ほこにして元親を討つこととし、四国攻略を光秀から恩子神おんこじんに信孝と丹羽長秀に命じた。これにより、

秀吉は面目もくろみを失うとともに、近畿管領的立場を強固にする自論見じろんみも失われた。

かつて足利将軍の右腕となつて、室町幕府を支えた土岐氏の再生・復活を目指しかけていた光秀にとって、それを阻む信長を討つチャンスが訪れた。ちょうど、守護の軍兵はなく信長は京都本能寺、嫡男信忠は京都妙覚寺(やがて二条城入り)にそれぞれ宿泊したのであり、信長・信忠父子の大きな隙ができた

のである。その間隙を突いたのが、本能寺の変の発生であつた、というのが、現在多くの人を納得させている説である。

一五八一(天正一〇)年五月一七日、家康供きょう応役おうえきを免じられ、備中高松で戦つてゐる秀吉への援軍出陣を命じられた光秀は、丹波龜山城へ帰り、出陣の準備をした。出陣を前に、二六日山城・丹波国境にある愛宕あたご神社へ参拝したおり、連歌会を催し、次の句を詠んでいた。

ときは今あめがしたしる五月哉

この句は、土岐氏である自分が天下を取る五月であると決意を表明した句として知られてゐる。

六月一日夜出陣した明智軍が、真意を秘めて、京都へ進軍し、一日未明信長父子を討ち果たしたのである。しかし、天下に号令する前に、備中から急速に引き返した秀吉軍に山崎の合戦で敗れてしまつた。

全國に光秀を愛する地があるのは

主君を討つた光秀は、逆臣の代表として悪名をとじりかせたが、その一方で、ゆかりの各地で功労者として祭られている。

県外の主なゆかりの地は

京都府福知山市……（城主・善政）資料館、御靈神社（光秀を祭神とする）、夏、光秀踊り

京都府亀岡市……（城主・善政）文化資料館、光秀祭り

京都府……（妙心寺境内に明智風呂）

大津市坂本……（城主・寺の復興、戦死者供養）、菩提寺西教寺、墓所、木像

福井市一乗谷……（厚い人情）、東大味に明智神社

県内では、

可児市瀬田……（本拠・城主）、長山城跡、明智一族墓所、天龍寺

土岐市妻木……（明智氏ルーツ・妻熙子の在所）、城跡、崇禪寺

恵那市明智……（母小牧方の在所、出生地説の一つ）

山県市中洞……（出生地・帰還地説）、桔梗紋の墓は光秀墓説

大垣市多良……（出生地説の一つ）、出身の城跡

などである。光秀の人情厚い人柄、ゆかりの地で地域貢献をしたことを顕彰している場合が多い。また、光秀は、医者としての力も持っていたことを示す史料が出て、その力で戦傷者を救つたり、配下・周辺の者を助けたりして、感謝されていた、といつてが分かつた。

